

変わる予感

11月27日に投票が行われた大阪府知事、大阪市長のダブル選挙で、「大阪維新の会」が圧勝しました。

市長選では、現職の平松氏は、民主・自民そして共産党の支援を受けて選挙戦を戦ったにもかかわらず、橋下氏という突風になぎ倒されてしまった感じがします。

「大阪維新の会」躍進の一番大きな要因は、既成政党に対する有権者の失望感の現れではないかと思われます。

特に大阪は、失業率も高く、生活保護率は全国最悪という閉塞感の漂う状況に置かれていますが、既成政党は有効な政策を打ち出せないでいます。これに対して、有権者が、橋下氏なら何かを変えてくれるのではないかと、という期待を持ったとしても不思議ではありません。

また、東日本大震災後の政府の対応を見ると、災害の規模が甚大であったとか、原発問題の大きな広がり、更には危機的國家財政といったような、大きな困難に直面しているとはいえ、復興対策にスピード感が感じられず、一向に先が見えないことへの苛立ちは大きいと思います。この苛立ちは、別に大阪府民だけのものではないでしょう。既成政党に対する失望感は、今や国民全体を覆っている空気のようなものであり、だからこそ、既成の各政党関係者は、今回の選挙結果に対して大きな危機感を抱いているのだと思います。

橋下氏は、大阪府知事に就任するや、職員の給与カットを断行するなど、歳出削減に取り組み、短期間で大阪府の財政を立て直しています。その間、彼は自ら前面に立って議会、府職員、市町村長などを説得し、公約実現に全力投球してきました。

橋下氏は、弁護士でありテレビタレントという抜群の知名度に加え、弁護士として鍛えられた弁舌の冴えという強力な武器を持っており、従来型の神輿に乗って選挙を戦うやり方では、勝てる相手はいないでしょう。

その手法は、時に独裁的との批判を浴びていますが、強かな実行力は誰しも

が認めるところです。橋下氏は時に過激な発言をして物議を醸していますが、彼が言いたいことは、今の政治に必要なのは、独裁といわれるほどの強力なリーダーシップであるということだと思います。確かに、社会状況をみると、彼のいわんとすることは理解できますが、しかし同時に、民主主義は数といわんばかりの対応には、一抹の不安を感じます。

報道によると、橋下氏は自身に対する独裁批判に対し、「こんな小太りでキュートな独裁者がいますか」と聴衆を笑わせたとありますが、ヒットラーとて、初めから凶悪な独裁者の顔をしていたわけではありません。彼もまた、選挙という民主的な手法によって権力を手にし、やがてその権力によって強権的独裁者となっていったということ、忘れてはならないでしょう。

日本は、民主主義の国家である以上、最後は多数決で事を決めるのは当然のことですが、しかし数が全てでもありません。時間はかかっても、少数意見に耳を傾け、十分議論を尽くすなど、合意形成に努力することが、民主主義社会の成熟のためには必要なことです。

さて、今回の選挙の争点は「大阪都」構想でした。その中身については明らかになっていませんが、大雑把に言えば、大阪市、堺市という政令市を壊して、新しい基礎自治体を造る。そうすれば、大阪府知事としてのリーダーシップが取りやすくなるということだと思います。良くいわれる二重行政の解消という意味では一つの考え方ですが、そこには当然、メリットもあればデメリットもあるはずで

橋下氏の手法を独裁的として批判し、「大阪都」構想にも距離を置いていた既成政党に、橋下氏がダブル選挙で大勝するや、「大阪維新の会」に秋波を送り、「大阪都」構想にも理解を示す動きが出てきています。しかし、これが単に次期国政選挙への影響を考慮したものであれば、疑問を感じざるを得ません。

国・地方を通じて厳しい財政状況にあり、社会福祉や医療制度など様々な社会システムも制度疲労を起こしている中、国と地方との役割分担、基礎自治体の役割や機能、都道府県といった広域自治体のあり方についても、抜本的に見直すべき状況にあることは明らかです。その意味で「大阪都」構想は、非常に大きな問題を提起していますが、それは勿論、大阪だけの問題ではありません。政令市を抱える全ての地域の問題であり、同時に、国の形を変えるほどの大きな問題なのだということを、政治家の皆さんはもとより、われわれも肝に銘じていくべきです。(塾頭 吉田 洋一)